令嬢完全調教

貞操帯と生徒会長

筑摩十幸
挿絵／猫丸

立ち読み版

KILL TIME COMMUNICATION

Contents

目次

序章 …… 4
第一章 生贄令嬢 …… 15
第二章 白昼の淫戯 …… 58
第三章 淫らなる連鎖 …… 99
第四章 陥落の序曲 …… 140
第五章 永遠の哀奴 …… 187

登場人物 *Characters*

松島 麗奈
(まつしま れな)

星城学園の生徒会長。自動車メーカー取締役の令嬢。お淑やかで誰にでも優く知性的だが、箱入り娘のため世間知らずな面もある。

本田 智沙
(ほんだ ちさ)

麗奈の親友で風紀委員。元気系のスポーツ少女。銀行頭取の娘で、正義感が強く活動的だが、やや子供っぽいところがある。

梶
(かじ)

星城学園の校務員である中年男性。夜は警備員も兼ねている。

水田
(みずた)

星城学園の男子生徒。肥満体の少年。

第二章　白昼の淫戯

それでも麗奈は歯を食い縛って歩みを進めた。松島家の長女としてのプライドが、変質者たちに屈することを許さない。自分の席から教壇までこんなにも遠く感じたことはなかったが、なんとか辿り着くことができた。

「顔が赤いようですが、熱でもあるのですか？」

「い、いえ……本当に大丈夫ですから」

すぐ近くから男性教師に見つめられて心臓が爆発寸前に高鳴る。グズグズしていると本当に頭がおかしくなってしまいそうだ。

（とにかく……はやく……終わらせないと……）

麗奈は震える指でチョークをつかみ、黒板に訳文を書き始める。背後からの視線が剣山のように感じられたが、今は何も考えないようにした。だが……。

「ううぅっ!?」

ヴゥゥンンと唸りを上げてイボ玉が振動を開始する。水田がバイブレーターのリモコンスイッチを入れたのだろう。淫らな振動が急所の女芯を舐め、くすぐり、痺れさせる。強烈な快美感に突き上げられ、一瞬爪先立ちになってしまうほど。

「あっ……あぁぁ……むっ」

破廉恥な声が出そうになるのを唇を血が出んばかりに噛んで抑えつける。教室という公の場で秘めやかな女の粘膜を責められるなどあり得ない。まるで悪夢の中にいる

ようだ。だが淫核を揺さぶる振動は紛れもない本物。そしてそこから伝わってくる妖しい疼きも本物に違いない。

校務員のイボ舌に狂わされ、異形ペニスに処女を奪われたおぞましい出来事がついさっきのことのように蘇り、言葉では表せない喧噪が下腹に渦巻く。心臓の鼓動が激しくなり呼吸も荒くなっていく。スカートの下の尻タブはすでに汗でジットリ濡れている。

「おや。そんなに難しい問題ではないはずですよ」

「え……あ……はい……で、できます……」

異変を気づかれたくなくて、麗奈は気丈に応えて訳文を書き続けた。文字が乱れてきたが構っていられない。とにかく終わらせて席に戻りたいのだが、しかし冷酷な監視者はそれを許すほど甘くない。

懸命の令嬢を嘲笑うように、さらなる仕掛けが牙を剥く。クリトリスの前後で振動していたイボ玉が、挟み込むようにその間隔を詰めてきたのだ。

「ひぁンっ！」

牝芯をぎゅっと摘まれ、それまでとは較べものにならない快美電流が恥丘を貫通し、子宮に突き刺さる。目の前に赤い火花が散ってカクカクと膝が戦慄く。とてもジッとしていられない凄い刺激だ。たった一日で自分の身体がここまで敏感になっているこ

とに愕然とさせられる。
「う……あ……っ」
奇襲を受けた令嬢の手からチョークが滑り落ちカツーンと床に転がった。何事かとクラスメイトたちは注目し、麗奈の妖しい様子がさらに視線を集めてしまう。
黒板にすがるようにしてゼエゼエと深呼吸を繰り返す麗奈。美貌は湯上がりのように上気し、汗が滲んだうなじが黒髪を貼りつかせている。何かを堪えるように眉をキュッと寄せ、長い睫毛をピクピク震わせ、緩んだ唇から熱っぽい吐息を吐き出す。超ミニのお尻がピクピク震えて、捩り合わせる太腿も汗ばんでいる。あまりにもセクシーな姿に教室はシーンと静まり返り、異様な雰囲気が拡がっていく。
（ああ……み、見ないで……くださいっ）
肉奥から漏れる微かな振動音が聞かれてしまうのではないかと思うと、生きた心地がしなかった。チョークを拾わなくてはと思うのだが、しゃがめばスカートの中が見られてしまうかもしれない。
（ど……どうすれば……いいの……？）
頭が混乱し、衆目の中立ちすくむ被虐の生徒会長。その間も急所に食い込んだ淫具からは、苛烈な愛撫が送り込まれてくる。そしてそれがイヤでも中年男のいやらしい舌や極太の肉棒を思い出させ、清純な少女の心を甘く腐敗させていく。

『お嬢さまは儂のチンポなしでは生きられぬマゾ奴隷になるのじゃ』
下品な顔を思い出すと、責められる股間がジワッと熱くなった。
（うう……私は……あの人に……）
昨夜、両親不在の一人きりの家で誰にも相談できないまま一時間以上シャワーを浴びた。しかしどんなに身体を清めて服を着替えても、梶のイボ舌に狂わされ、極太男根に膣内射精までされてしまった惨めな事実を消すことはできない。ひょっとしたら膣奥には男の精の残滓が残っているかもしれない。そう思うと下腹がカアッと火照り、動揺した括約筋があたかも淫棒を食い締めるように蠢いてしまう。
狼狽えて視線を彷徨わせると、探るように見つめてくる級友たちと目が合った。身体に突き刺さる無数の視線が針のように感じられ、金縛りにあったように身動きできなくなる。
『いじめられるのが大好きな変態マゾに仕込んであげますぞ』
（ちがう……ちがいます……私マゾなんかじゃありません！）
梶の言葉を思い出すうちに、あの淫らな事件のすべてをクラスのみんなはもう知っていて、心の中で嘲笑っているのではないかという気がしてくる。何しろあのレイプは撮影され、水田に写真も撮られてしまっているのだ。
（ああ……そんなのいや……あの姿を……みんなに見られるなんて）

そう思った瞬間、朦朧とした脳裏に異様な光景が浮かび上がる。
醜い中年男にのしかかられ犯されている自分を級友たちが取り囲み、嗤いながら観賞しているのだ。泣き喚いても誰も助けてくれず、それどころか携帯のカメラでフラッシュを浴びせてくる。
（いや……こんな私を見ないで……見てはいやです）
恐怖とともに何か得体の知れないざわめきが、心臓を鷲づかみにした。白昼夢の世界に迷い込んでしまったように、目の前に桃色の霞がかかってきて教室の風景が揺らいで見える。どす黒い陶酔感が螺旋に巻きつきながら足元から這い上がってくる。
「松島さん？」
「あ……あ、あ……」
教師の声で現実に引き戻され、危うく気をやる寸前だったのだと気づく。太腿の内側にトロリと熱い蜜が滴るのを感じ、全身が恥辱に燃え上がった。
「ひっ！　ああ……あの……す、すみません……き、気分がすぐれないので……ハアハア……ちょっと保健室に……」
それだけ告げると、麗奈は逃げるように教室を後にした。
「それで授業を途中で抜け出してしまったのですか」

「約束違反はお仕置きだよ、会長さん」
期待以上の成果に凌辱者たちはニヤニヤ嗤っている。当然これを口実にいやらしいことを要求してくるに違いない。
「うう……だ、だって……あんなことされたら……」
「言い訳は結構です。罰として放課後までそれを着けてもらいましょう」
ぴしゃりと言われて麗奈は青ざめる。貞操帯の中では今もイボ玉が微弱な振動を送り込んできている。敏感になった粘膜を執拗にいじめられ、不覚にも肉体は異様なまでの昂奮状態にあった。このままでは授業中に教室で果てさせられてしまうかもしれない。
「そ、それだけは許してください。お願いします。何でも言うことを聞きますから」
「ふむ、そこまで言うなら。儂も鬼じゃないですからな」
ニヤニヤ嗤いながら梶が近づいてくる。いかにも何かを企んでいる様子だ。いやな予感がした令嬢は後退ったが、すぐに屋上のフェンスに退路を断たれた。
「ではここでストリップをやってもらいましょうか」
「えっ！　こ……ここで……っ⁉」
虚を衝かれて麗奈は周囲を見回す。コンクリート打ちっ放しの屋上には三人以外の人影はないが、なんと言っても真っ昼間の校内だ。そんなところで裸になるなどあり

得ない。運動場や隣の校舎には生徒がいるし、ひょっとしたら見られる可能性もある。
「いやなら貞操帯は外しませんぞ。オシッコだってできませんから、授業中にお漏らししてしまうかもしれませんな」
「ああ……そんな……」
貞操帯を嵌められた麗奈は排泄まで管理される立場なのだ。梶の言う通り尿意はジワジワ溜まりつつあり、放課後まで堪えるのは困難だろう。
「わ、わかりました……脱ぎます……」
自棄気味に応え、麗奈はブラウスのボタンを外していく。緊張で指が震えるが気合で抑えきった。一つまた一つと外れていくにつれて襟元が広がり、縄に括られた乳肌が露呈されていく。
「早くしないと誰か来るかもしれないよ。あと、ネクタイは着けたままでお願いするよ」
同級生の水田にまで命令されて屈辱に唇を噛む。屋上をそよぐ初夏の風が胸元をヒンヤリとさせ、汗をグッショリかいていることを改めて知る。普段陽光を浴びたことがない胸肌は透き通るように白く、明るい日差しを熱いほど感じていた。そこに感じる二人のいやらしい視線も、令嬢を羞恥のどん底に突き落とす。
（外で……男の人の前で裸になるなんて……）

豊満な乳房は普段から異性の視線を集めていたが、直接見られるのはそれとは次元が違う恥ずかしさである。密室ならまだしもここは白昼の屋外なのだから、気の小さい麗奈はもう失神寸前だった。

非常識で破廉恥な行為をしているという自覚が緊張を高め、ドクンドクンと鼓動が激しくなっていく。周りを意識すまいと思えば思うほど、普段は気づかないくらい遠くの生徒の声を聞き取ってしまい、スリルと羞恥でガクガクと膝が震え出す。

「昼休みが終わってしまいますぞ」

タバコをくわえて火を点ける校務員。余裕綽々といった表情が癪に障るが、今は我慢するしかない。

（や、やるしかありません……）

なんとかボタンを外し終わったブラウスの襟を、思いきってパッと掻き広げた。

美しい曲線を描く乳房がまろび出て、タプンと上下に弾む。

「見事な乳じゃ。明るいところで観るとまた一段と美しい」

「ハアハア……あぅ……そんなに見ないでください……」

サイズは86のEカップ。大きさも十分だが、その形の美しさに男たちは息を呑む。名山の稜線を彷彿とさせるラインは綺麗な円錐形に盛り上がり、頂上はツンと斜め上を向いて尖っている。健康的で初々しい新鮮な果実の魅力そのものだ。恥ずかしさで

胸の谷間は汗に濡れ、妖艶な色気がグンと増していた。身体の線がほっそりしているだけに、その豊満な乳果はサイズ以上に大きく感じられる。

さらに乳肌の肌理の細かさ、透明感は極上のシルクを思わせる美しさ。長年の良家の血統が磨き上げた美の結晶なのだ。

「さあ、スカートも脱ぐのじゃ」

すぐにでもむしゃぶりつきたい欲求を抑えながら梶が命じた。

「はあはあ……わ、わかりました……」

視姦に堪えながら麗奈はスカートのホックに手を伸ばす。ここまできて覚悟が決まったのか、意外なほどあっさりホックは外れ、パサリと足元に落ちた。

「おお、素晴らしい」

梶はいやらしい舐めるような目つきで令嬢を品定めする。

胸の下から鋭角に切れ込み、絞ったようにキュッとくびれる腰。そこからお尻にかけての盛り上がりは、女の美しさを象徴する優美さだ。

なだらかな腹筋には浅く縦筋が刻まれ、縦長のお臍と一体化している。そこから少女らしいしなやかな筋肉の上に、女の皮下脂肪が優しくまとわりつく下腹部が続く。同年代の少女よりやや早熟で、太腿からふくらはぎにかけてのメリハリある脚線は、ハイヒールなどが似合いそうな完成度だ。

「その革の褌もよく似合っているよ、会長さん。ヒヒヒ」
水田が嗤いながらファインダーを覗き込み、連続でシャッターを切る。
「うう……見ないで……」
貞操帯はくびれ腰にベルトで食い込み、縦に伸びたT字帯が股間をぴったり覆ってお尻のほうに回っている。ヒップの部分は紐状に細く、ムチムチした尻タブは完全に丸見えだ。貞操帯以外に身に着けているのはネクタイ、ソックスと革靴のみで、それがなんともフェティッシュないやらしさを清純な美少女に付与していた。
「見なければ外せませんぞ。そんなにそいつが気に入りましたか」
「き、気に入るわけありません。うう……早く外してください」
全裸同然の姿で屋上にいることが恥ずかしくてたまらない。羞恥が神経を過敏にさせるのか、淫核を蝕む淫振動も一層強く感じてしまう。もうジッとしていることができなくて胸と股間を隠してモジモジと腰をくねらせる。
「こんなところで裸になりたいとははしたないお嬢さまじゃ。ヒヒヒ。じゃが服を脱いだだけでは罰になりませんよ」
意地悪く囁きながら校務員が正面に立つ。
「お嬢さまの唇で、サービスをしてもらいましょうか」
梶がいそいそとズボンのジッパーを下ろし始めたのを見て、麗奈は小さな悲鳴を上

げて顔を背ける。
「な、なにをするんですか……こんなところでっ！」
胸を隠したへっぴり腰のまま、まっ赤に染まった美貌をブルブルと振りたくる。屋上で他に人がいないとはいえ、真っ昼間の校内である。運動場には生徒たちが大勢いるし、はしゃぎ合う声も聞こえてくる。そんな公共の場所で破廉恥行為をさせられるなど信じられなかった。
「フェラチオじゃよ。儂の奴隷ならこれくらいできて当たり前ですぞ」
生徒会長の抗議を無視して男根をつかみ出す。赤黒い肉棒は早くも充血を強め、重そうな鎌首をもたげようとしていた。
「ひっ」
改めてその異様な勃起男根に息を呑む。毒キノコのように赤い傘を拡げ、太い幹にはミミズのような血管がのたうち回る。ところどころに突き出した肉イボも気持ち悪いことこの上ない。ひょっとしたら凶悪なエイリアンが梶の股間に取り憑いて、彼を操っているのではないかとすら思えてくる。
「生徒会長はフェラチオ知らないんじゃないかな」
カメラを構えた水田がからかうように顔を覗き込んでくる。
「し、知りません……そんなもの……」

第四章　陥落の序曲

「んあぁぁ……ああう……は、はい……」

肛門粘膜をこね回されて、智沙は救いを求めるような目で麗奈を見る。その瞳に被虐の悦びを知ってしまった女の哀しみを見たような気がした。

「ハァハァ……いやらしい機械で責められて……し、処女を奪われて……恥ずかしい姿をいっぱい写真に撮られたの。そ、それから……あぁぁん」

自らの告白に高揚したように、頬がさらに赤く上気していく。腰の動きもさらに加速していく。

「お……お浣腸を何度も何度もされて……おトイレに行かせてもらえなくて夜の校庭や教室でお漏らしさせられたの……最後にはとうとうお尻も犯されちゃったよ……アアン……初めはすごく痛かったけど……今じゃ……お尻だけでも感じるようにされちゃったの……ハァハァァン……お尻、すごく気持ちよくて……頭が変になりそうだよぉ……麗奈ぁ……見てる？　智沙のお尻こんなに拡がるのぉ……あっあンっ」

言っている間にも秘孔からマゾの牝蜜が溢れてきて、会陰を垂れ落ちアヌスを潤滑させていく。濡れた肛門を締めたり緩めたりしながら男根を呑み込み、さらに腸液をジクジクと湧かせている。その浅ましい様子はまさに性器で、たった二週間での親友の変貌ぶりに麗奈は恐怖すら感じた。

「フヒヒヒ、今の智沙ちゃんは僕の何なのかな？」

「あぁぅん……智沙は……み、水田君の……妹になったの……お兄ちゃんの好みの女の子になるために……アソコの毛も……剃ってもらったの……あっあぁん」
「よく言えたね、智沙ちゃん。それでこそ僕の可愛い妹だ」
「あ、あむぅん……お兄ちゃん……あぁ……ちゅぱぁ」
顎をしゃくられて水田に唇を奪われる智沙。お互いの舌をねっとり絡み合わせ、唾液を混ぜ合う。強要されているのかどうかもわからないほど、本当の恋人のような濃厚なディープキスである。
「智沙ちゃん……」
あまりのことにもう言葉も出ない。あの勝ち気で快活な智沙が、あんな風に変えられてしまうなんて。もうこの悪魔のような男たちからは逃れられないのではないかという気がしてくる。
「今度は麗奈お嬢さまがお披露目する番じゃな。暴れると怪我をしますぞ」
ハサミを手にした校務員が近づいてきた。しかし茫然自失の令嬢は抵抗もほとんどできないまま、ブルマの底の部分をジョキジョキと舟形に切り抜かれてしまう。
「ああ、智沙ちゃんの前では……や、やめてください」
「ご自分だけ助かりたくて、お友達を生贄に差し出したのじゃ。罰を受けねばのぉ」
梶は無茶苦茶な理屈を振りかざした。智沙には憎悪を、麗奈には罪悪感を植えつけ

ることで、二人の友情を破壊してしまうつもりなのだ。
「さあ、儂の顔の上に跨るのじゃ」
仰向けになり、は虫類のような長い舌をチロチロ蠢かせた。やはり麗奈の弱点である舌責めを狙っている。
「そんなこと……できませんっ」
無理矢理されるならまだしも、自ら快楽を貪るようなはしたない姿を親友の前に晒すのは、あまりにも恥ずかしすぎる。
「どうしたのじゃ、お嬢さまの大好きなナメナメじゃぞ」
「会長さんが乗り気じゃないなら、智沙ちゃんにしてもらうだけさ」
「うう……智沙ちゃんにはこれ以上ひどいことしないで」
卑劣な脅迫に唇を噛みながら、ブルマ姿の令嬢はオズオズと校務員の頭を跨いだ。
直下から見上げてくる梶と視線が合うと、羞恥で身体が熱くなる。ブルマの底を抉り取られているのだから、クレヴァスは丸見えなのだ。視線を感じる股間が熱蠟を浴びたように熱い。
「さあ、遠慮せずそのまま腰を降ろすのじゃ」
「わ、わかりました……うう……っ」
激烈な羞恥の炎に骨の髄まで焦がされながら、麗奈はゆっくり膝を曲げ、脂ぎった

中年男の顔面へ腰を落としていく。近づくにつれて男の鼻息が感じられて、おぞましさに背筋が粟立った。
「ああ……恥ずかしい……はぁぁ……ああんっ」
しかしここでやめるわけにもいかず、麗奈は瞼を閉じてお尻を沈めきる。クチュッと音がして、媚粘膜が男の顔と接触した。
「ヒヒヒッ、なんともよい香りじゃ」
「あうぅっ。匂いなんて嗅がないでください……あぁん」
顔面騎乗という破廉恥極まりないポーズを取らされ、麗奈はイヤイヤと首を横に振る。しかもその姿を親友に見られているのだから羞恥は何倍にも膨れ上がる。
「逃しませんぞ」
男の腕が下から少女の腰を抱くようにして引きずり込む。麗奈はオシッコスタイルのような格好で、梶の上にすべてをさらけ出してしまう。
「いや……いや……舐めないで……それはいやなのっ……あ、ああぁぁんっ！」
ワレメに沿ってベロリと舐め上げられ、麗奈はギクンと肩を跳ね上げた。一週間ぶりに味わうぬめつく舌粘膜の感触、染み込んでくる唾液の生温かさ、男の息遣い、そして何よりあの真珠玉の滑らかな硬さ。
「ふあぁ……あああぁ……あああぁぁんっ」

それらを媚肉に感じただけで頭の中が快感の記憶で埋め尽くされ、バラ色に染まる。それは幸福感にも似た陶酔で財閥令嬢を酩酊させた。
「おや、もう濡れておりますぞ。そんなに儂の舌が恋しかったのですかな」
「そ、そんな……ことは……あぁぁぁ、ううぅんっ……ンあぁぁっ……だめぇ」
はっきり否定することもできず、麗奈は梶の舌技に翻弄されていく。ピチャピチャと猫がミルクを飲むような音が響くたび、腰椎に電流が走りお腹の底がカアッと熱くなる。一週間のブランクが身体を変質させたのか。燃える子宮の熱が膣襞を蕩かせて、ほとんど条件反射的に恥ずかしいほど大量の愛液が湧き出してしまうのだ。
（ああ……身体が……勝手に……）
しゃがんだお尻がクネクネと揺れ、色っぽいベリーダンスを踊り出す。プリンと持ち上がったヒップは、その深い谷間に醜い男のダンゴ鼻やタラコ唇を迎え入れ、ぴったりと密着させる。あたかももっと舐めてくれとおねだりするかのようだ。
「ぷはぁ……むふふっ、お嬢さまのお露はいつ飲んでも最高じゃ。若返りの妙薬じゃよ。ほれほれ、もっとマン汁を出すのじゃ。くちゅくちゅっ」
「う、うあぁ……飲まないで……ください……ああん……いやぁン」
何度も腰を上げようとするのだが、男の逞しい腕に捉えられて舌責めから逃れられない。ヂュルヂュルと愛液を啜り飲まれ、麗奈はうなじまでまっ赤に染まった美貌を

振りたくる。
（ああ……こんなの……恥ずかしい……イヤなのに……感じちゃう）
心と裏腹に肉体はますます淫悦に支配され、美麗な花びらが拡がって粘膜を晒してしまう。膣孔が蠢いて、はしたない牝蜜を男の舌にトロリと吐きかけてしまうのだ。
「見てみなよ、あの顔。智沙ちゃんが犯されているのにねぇ」
「ああ……麗奈……」
激しい悶えっぷりに智沙も呆然と見守ることしかできない。
「一週間舐めてもらえなかったから、溜まっておるのう。ヒヒヒ、遠慮せず全部儂の唇に吐き出すのじゃ。お嬢さまのいやらしい願望が詰まったお汁をな」
舌が膣内に侵入して抜き差しを繰り返した。イボ舌が蜜襞をぐりぐり責めながら愛液を舐め取る。熱い波動が粘膜から子宮に伝わり、そこからさらに全身へ波紋のように拡がっていく。それは確実に被虐絶頂の記憶を蘇らせ、麗奈の脳随をジーンと痺れさせた。恥蜜の匂いや味を調べられていると思うと顔から火が出そうだ。
「あ、あああぁ……そんな中まで舐められたら……また濡れちゃう……あああンっ」
巧みな舌技で媚肉が溶けてしまったかのよう。かつてないほど愛液を溢れさせながら令嬢は狂わされ、ガクガクと頭を揺さぶった。いつしか身体中に汗が噴き出して、体操シャツが貼りついた上半身は、美しいボディラインを明瞭に浮かび上がらせてい

る。タプタプと揺れる双乳の上、乳首がぽっちり尖りきり、臙脂のブルマの尻タブがキュッとえくぼを刻んで強張った。

この一週間は智沙を奴隷に堕とすだけでなく、麗奈の身体をより淫らにさせるための熟成期間でもあったのだ。

「ンあぁ……あぁぁ……そんなに舐めないでください……ああ……お……お露も飲んではダメです……ああぅん……」

だが言葉とは逆に令嬢の腰はますます男の顔に密着し、円を描くようにして擦りつけていた。グチュグチュと粘着音が響くたび、梶の顔は唾液と牝蜜でベトベトに濡れていく。当然舌はより深く侵入し、子宮口近くまで舐めまくられてしまう。ぶ厚い唇はクリトリスを巧みに刺激してくる。

「気持ちいいでしょう。お嬢さまはクンニが大好きじゃからなぁ……じゅるるっ」

「あぁぁっ……奥まで舐められて……た、たまんない……ハアハア……狂うの……狂っちゃうぅ……っ」

麗奈の中で女が完全に目覚める。極太の男根で蜜壺をぶち抜かれ、子宮を思いきり突き上げられたい。淫らな欲求を抑えきれない肉体に小刻みな痙攣が走り出し、背筋が徐々に反り返っていく。紅潮した首筋にまとわりついた黒髪がセクシーだ。

「麗奈……あぁぁん……麗奈ぁ……」

麗奈の昂奮が伝わったのか、肥満少年の胡座の上で腰を振らされていた智沙も切迫した悲鳴を上げ始めた。
「智沙ちゃんも盛り上がってきたね。初めてお尻でイクところが見られそうだ」
「い、いや……そんなの……こわい……いやだよぉ」
過酷な調教で智沙の肛門性感は高められていたが、まだお尻で気をやったことはなかった。不浄の排泄器官で絶頂させられれば、それは計り知れないダメージとなるだろう。
「あ、ああン……智沙ちゃん……頑張って……負けちゃダメ……あ、あぁっ！」
「麗奈……ああ……麗奈ぁ……たすけて……こんなのいやぁ」
「はぁぁ……智沙ちゃん……ああっ！」
救いを求める親友の声に答えたいのだが、麗奈自身すでに極限まで追い込まれていた。親友が見ていることも忘れ絶頂に達しようとしたその時、梶はいきなり責めを中断してしまう。
「そんな……あぁぅ……っ」
急制動をかけられた肉体を軋ませながら、麗奈は中年男の顔からずり落ちて床に突っ伏した。寸止めのもどかしさにキリキリと奥歯を食い縛る。
「勝手にイクことは許しませんぞ。お友達より先にイクなどもってのほかじゃ」

「ハアハア……うう……ひどいです……」
焦れったさが子宮を締めつけ、甘い痛みすら感じる。愛撫は止められても一度灯った淫らの火は身体の奥底でジリジリと燻り続け、いつまっ赤な炎を噴き上げても不思議ではない。麗奈は汗まみれの美貌を歪め、恨めしそうな視線を梶と水田に向けてしまう。淫らに調教された身体は焦らし責めに弱いのだ。
「松島さん、智沙ちゃんなかなか最後までイけないみたいだから手伝ってよ」
「ハアハア……わ、わたしが……!?」
「それは名案じゃの。お友達にもクンニの気持ちよさを教えてあげるのじゃ」
麗奈の腰を四つん這いに持ち上げ、一気に剛棒で刺し貫いた。
「あ、あぁぁぁ――――っ！」
発情粘膜に淫肉塊をズブリと埋め込まれ、淫痺がジーンと身体の中心を伝播していく。この一週間放置されていただけに、隙間なく充填された蜜壺には得も言われぬ快美が湧き起こった。胎内に自分とは違う体温、脈動を感じることがこれほど心地よいとは。この醜い男に女にされてしまったことをイヤでも思い出してしまう。
「久しぶりじゃからズーンと腹の底に響くじゃろう。ヒッヒッヒッ」
「ひぃ……んあぁっ……深い……あぁぁ……っ」
梶の言葉通り、膣孔を男の肉体の一部で満たされるというそれだけで、幸福感にも

似た牝悦が身体の内側を満たしてくる。調教をされなかった一週間、どことなく感じていた違和感が綺麗さっぱり消えていく。この男に穿たれてしまった淫孔がペニスを受け入れるためのモノなのだと、改めて実感させられた。

「ほれほれ、前に行くのじゃ」

「あ……あぁぁ……」

巨根に突き動かされ黒髪の生徒会長はヨロヨロと這い進む。桃色のベールがかかった視界に、スポーツ少女の健康的な裸体が映った。小柄でどちらかと言えば幼い印象だった身体は、牡の精液を注ぎ込まれて急速に女らしさを増していた。

「さあ、智沙ちゃん。お尻でイって僕らの奴隷になるんだ」

「麗奈、やめて……お尻でなんてイキたくない……奴隷なんていやだよ」

「逆らっても無駄さ」

水田が伸びやかな脚線をM字に拡げると、聖域が露わになる。翳りを失った肉土手はこんもり盛り上がり、そのぶん縦に切り込むスリットが一層深く感じられる。浅く拡げったラヴィアは透明感のある桃色で、処女のように清らかだ。しかも肛門セックスの快感が燃え移ったのか、可憐な花びらは果汁たっぷりに濡れそぼっている。

「はやくするのじゃ。お友達を裏切った罰じゃからな」

親友だった少女の股間にグッと頭を抑えつけられて麗奈は屈辱に呻く。しかしそれ

以上に、自分のせいで智沙が辛い目に遭っているのだと思うと、贖罪の気持ちが浮かんできた。
「うう……ち、智沙ちゃん……ゆるして」
罪の意識に押し流され、麗奈は秘園に舌をそよがせはじめた。
「あああぁあっ！　だめぇ……麗奈ぁ……ああんっ！」
ピチャピチャと水音を立てながら肉の合わせ目をなぞり分けていくと、濃厚な淫蜜が中から溢れてきてきた。ムッとくる牝の淫香は発情した女の匂い。元気系少女の身体は、肉棒調教により着実に女へと造り替えられているのだ。
（智沙ちゃんも……奴隷に……）
親友を守れなかった罪の意識が麗奈から抵抗する気力を奪う。どうせ逃げられないなら、いっそのこと早く堕ちたほうが苦しみも少ないのではないか。そんな気持ちにも後押しされて、麗奈の舌が少しずつ積極的に動き始めた。
「その調子じゃ。自分がされて気持ちよかったところを思い出すのじゃ」
「んふっ……ああん……くちゅ……智沙ちゃん……ああ……ちゅぱ……」
陰毛がないせいで舐めやすく、麗奈は唇で花びら全体を覆うように愛撫しながら、舌先で可憐な淫核をコロコロと舐め転がした。包皮をじっくり押し剥いて、敏感な粘膜を剥き出しにするのだ。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

http://ktcom.jp/

◎雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ!
◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルの**バックナンバー**も買えるよ!
◎**ジャンル別**で作品も選べて超便利!
◎二次元編集部の愉快な**Blog**も更新中!

KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!